

聖護院道興の旅

京都^{しやうごいん}聖護院の僧道興^{どうこう}は文明16年（1486）に諸国巡礼^{しょこくじゆんれい}の旅に北陸を通過しました。その時に書き記した道中記『廻国雑記』には、矢作^{やはぎ}と野々市^よで詠んだ和歌が記されています。

のの市人はたちもをやまず

風おくる一村雨に虹きこえて

雨が降っても立ち止まることのない野々市の人々をみて

夏も末なる弓張の月

こよひしも矢はきの里にゐてそみる

「矢作の里」で宿泊したときに、明け方の月をみて

『廻国雑記』による道興の旅

6月16日 京都を発つ

小浜・越前（福井県）を通り、加賀（石川県）へ白山登拝後、鶴来、矢作（宿泊）・野々市・津幡などを通過して石動山を登拝し越中（富山県）へ

7月15日 越後（新潟県）の国府

以後関東方面へ 日光・鎌倉等の諸寺を巡拝
翌年春頃京都に戻る



聖護院道興歌碑（布市神社）



京都 聖護院

道興（1430～1501年）

室町時代中期の僧で、聖護院の門跡を務めました。門跡とは、格が高い寺院の、皇族や摂関家出身の子弟の住職のことです。

白山参拝後、能登方面に向かう道として矢作や野々市を通過していたことがわかります。

